

草創の創価大学を語る

―別科日本語研修課程の歴史―

石 川 恵 子

みなさん、こんにちは。ただいま、ご紹介に預かりました石川でございます。

本日参加して下さった中には、留学生、元留学生、或いは同僚の方々等、別科を知る方々が大勢いらっしゃるので、改めてお話することに少しときどき致します。ただ今回このお話を頂きまして、私は大変に嬉しく存じました。先ほど、司会の中山先生も大学に勤められて30年におなりになるそうですが、実は私もこの大学に奉職して40年になります。

4年ほど前に創価女子短期大学に移りましたけれども、それまで1975年からずっと留学生教育に当たって参りました。あまり自分の事を話したことはなかったと思うのですが、こうした機会に少し自分自身のことも含めて、一応2011年までの別科の歴史をまとめてみました。本日はお話しするのは中国留学生を受け入れた頃のことを中心にしたいと存じます。なぜそれをお話ししなければならないのかということも合わせて述べて参りたいと思っております。

まず、別科日本語研修課程の歴史ということですが、今日の話は次のようにしていこうと思っております。それは、私自身の自己紹介、なぜ日本語教師になったのかということ、それから、牧口常三郎先生と留学生交流。これは牧口先生が教鞭をとられた弘（宏）文学院というところと嘉納治五郎（かのうじごろう）という人の話を少ししたい。次に創価大学の留学生交流です。特に日中国交正常化後、正式に受け入れた初めての中国からの留学生。そして留学生の受け入れの変遷と留学生群像。最後に結びに代えて今後への期待というこんな順番でお話をしたいと思っております。

私は1975年にこの大学に参りました。5期生の入学した時です。76年には別科ができ、以来留学生の日本語教育に当たってきました。

2002年から2011年までは別科長を務めさせて頂きました。そして、2012年に創価女子短期大学への異動がございました。なぜ、私の事を話そうと申しましたのは、私の人生の中で大きな原点となった一つが、1968年の創立者池田大作先生の「日中国交正常化提言」でございます。それに向かって学生時代を過ごしたと言っていいかもしれません。創立者がなぜ創価大学をお建て

になったのかということをお皆さんはよく知っていると思いますが、いわゆる 60 年、65 年から 70 年代にかけての学生運動の盛んであった頃に、私は大学時代を送りました。68 年に東京教育大学という大学に入学しました。現在の筑波大学です。この時、東京教育大学というのは筑波大学への移転の問題を抱えていました。大学管理法というのが大きく世間の注目を浴びて、産学協同の大学を創ろうという話がでてきた頃で、私が大学に入った 5 月からロックアウト、つまり学生側が大学管理法に反対をして教室を全部封鎖したんです。大学に入ったけれども授業が受けられない。本当に暗澹とした学生生活の第一歩でした。その中で、自分自身が一体何をすればよいのか、不安の中迷っている時期に、大学 1 年生の 9 月に創立者の歴史的な「日中国交正常化提言」がございました。そして、その時からちゃんと勉強しようという覚悟が決まりました。

(スライドを指して) これが 1968 年の学生部総会での先生の日中国交正常化提言のお姿であります。その時に竹内好という魯迅研究家が、先生の講演に「光はあったのだ」という論評を加えます。私は本当に、自分自身の人生の中にも、「正に光があったのだ。ここから大学時代、本気になって中国語を勉強しよう。中国の事を知ろう」というふうにした。これがスタートでございました。そして、この後、色々なことがありましたけれども、大学 4 年の 8 月、9 月、まだ日中の国交は正常化されていない中で、学生訪中団募集の論文に応募します。そして、何とか中国に行きたいという、そういう思いで論文を書き始めました。そしてその一つが実って、日中学生友好団の一員として、中国に 2 ヶ月間行くことができました。

71 年の 9 月、細かい出来事は省きますけれども、この訪中団学生は、周恩来総理と会見の機会に恵まれました。(スライドを指して) 真ん中にいらっしゃるのが周恩来総理です。そして郭沫若(かくまつじゃく)さんはじめ、当時の中国の要人方、です。そしてこれが私。そしてここにいらっしゃるのが後に創価大学と北京大学の交流の中でお見えになった賈惠萱(かけいけん)先生です。賈惠萱先生は私たちの団の通訳をして下さいました。何十年か後にこのキャンパスでお目にかかることになります。また、この団には 6 名の志を同じくする学生部員がいました。こう

周総理との会見 1971年9月



というような学生時代を送りました。

この後大学院に進みますけれども大学院在学中、池田先生の第一次訪中が実現をします。1974年春、先生が訪中されました。そして、皆さん方ご存知でしょうけれども1974年の12月5日、第2次訪中の時に池田先生は周総理と会見をなさいます。そして、その年の12月31日に当時の中国大使館の金蘇城（きんそじょう）さんと先生が対談をされて中国からの留学生の受け入れが決定する。古い書類を見ていましたら翌年の1月28日には金蘇城さんが創価大学にお見えになって、中国の留学生を正式に受け入れるという流れになっておりました。そうした中で私自身は、まさか日本語教師になるとは思っていませんでした。東京教育大学は教師養成系の大学でございますから、いずれ高等学校の国語の教員をするつもりでおりましたが、中国の滞在等の経験も生かして、日本語教育をやってみないかというお話を頂き、創価大学に来るようになりました。その中で私自身、自分が今回こういうようなお話をするに当たって大変に不思議に感じたことがいっぱいあったんですね。それは私が東京教育大学の出身だということ、牧口先生は、1903年に「人生地理学」を発刊されたたくさんの学者の方々との交流を持ちます。ここには多分塩原主事はじめたくさんの方が研究をされていると思いますけれども、この時に多分、嘉納治五郎との交流があったのだらうと思います。嘉納治五郎という方は、講道館ってご存知ですね、柔道の殿堂を創立された方です。そして東京教育大学の前身である高等師範学校の校長を3期にわたって勤められた方なのですが、その時期に多分牧口先生との出会いがある。1904年は、牧口先生は大日本高等女学会という、女子教育に携われる時期なのですが、この頃茗溪会館、これは今も筑波大学、東京教育大学の同窓会館の名前ですけども、その同窓会館で書記として当時の高等師範の出版事業に牧口先生は携わっておられました。その当時に嘉納治五郎は、清国からの留学生を受け入れて私塾を作ります。それが亦楽書院（えきらくしゅいん）、さらにそれが発展して弘文学院ということになってくるわけですが、ここで牧口先生は地理学の教鞭を執られていると思います。この関係がありますが、なぜこういうようなことを申し上げたかということ、この当時の嘉納治五郎を中心とした弘文学院等の清国からたくさん明治時代に留学生が来た。そして、その結果がどうだったのかということとあわせて、その留学生の受け入れということが持つ問題点等、様々なことについてあわせて語りたいなと思って取敢て明治の話をお出ししたんですが、これは次の留学生の受け入れについてと関わってきます。

さて、創価大学の留学生の受け入れということにお話を進めさせていただきますが、これはもう本当に皆さん方は、よくよくご存知の話だろうと思いますけれども、『新・人間革命』の15巻等が出てきますけれども、1971年に創価大学が開学をします。そして1975年に中国からの6名の留学生を受け入れますが、こうしたことが始まる前、まだ創価大学の卒業生が出る前から創価大学という大学は香港中文大学との交流を進めている、創立まもない本当に生まれたての大学が既に様々な形で国際交流に踏み出していたということです。また中国からの6名の留学生を受け

創価大学の留学生の受け入れ (1)

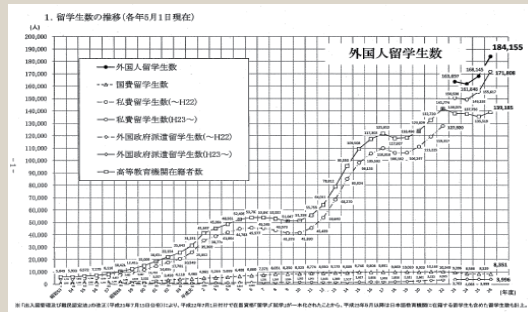
- 1971年 開学『新・人間革命』15巻 72年 日中国交正常化
- 1975年 中国から6名の留学生を受け入れる『新・人間革命』21巻
- 1976年 別科日本語研修課程開設 9月より私費留学生の受け入れ
- 中国政府派遣留学生 アリゾナ大学 ポールバレー大学
- モスクワ大学 ルンド大学等からの交換留学生
- ※1977年 創大祭 留学生喫茶 誕生
- 83年「留学生受入10万人」計画
- 1985年 第2通教棟に国際部事務室の移転と別科専用の教室の設置
- 短期日本語研修の受け入れ
- 香港中文大学 マラヤ大学 シンガポール大学 インドネシア大学

創価大学の留学生の受け入れ (2)

- 1995年 国際交流センター設置
- 交換留学生の増加 4月、9月の受け入れ開始
- アメリカ創価大学からの研修生の受け入れ
- 90年文学部に日本語日文学科開設
- 1999年 日本伝統文化体験の授業開始
- 2000年 学部特別履修制度の開始(学部科目の履修と単位認定)
- 2002年 アメリカ創価大学からの研修生の受け入れ
- 08年「留学生30万人」計画
- 09年 大学院国際言語教育専攻
- JAS IP GCP プログラム開始
- 2011年 日本語・日本文化センターの開設(別科を内包) 14年 SGU採択

入れたこれは「新・人間革命」の21巻に詳しく出ています。後ほどスライドをお出ししますが、76年に別科日本語研修課程ができます。別科ってなんだかわかります？本科に対して予科という、そして正科に対して別科という呼び方があります。つまり正科というのは基本的な年限が決まっていて、大学なら4年、短大なら2年、それに対して別科というのは促成科、なるべく早く短くやるという、そういうようなことがもともとの語源のようですけれども、創価大学が別科を作った時は、学校法人の中に学則を別に持つ付属の機関として、大学と並んだ形で、今ですと創価大学と創価女子短期大学と二つが一法人の中にありますね。それと同じように創価大学と別科日本語研修課程というのが並立してあって、しかも別科ということで4年制ではなくて1年間の日本語の予備課程としてそこで学んだ後、留学生が本科である大学に入っていく、或いは大学院に入っていく、そういうような日本語の教育機関でした。もともと別科というのは日本語研修課程だけではない、いろんなもの他大学では置いたかもしれませんが、創価大学では、別科日本語研修課程が76年に設置され、同年9月より私費留学生を受け入れます。中国からの国費留学生は初めは文学部の聴講生として受け入れましたが、翌76年4月より別科上級課程の学生になります。この後続いて、アリゾナ、ポールマレリー、モスクワ、ルンド大学等からの交換留學生がきます。そして皆さん方が創大祭でお馴染みの留学生喫茶は翌年1977年に生まれました。そして1985年にもう今無くなりましたけど、今はこの中央教育棟の中に含まれた第二通教棟というところに移りまして、ここで初めて

留学生数の推移



日本学生支援機構 HP「留学生受入れの概況」より

別科はAV教室を造って頂くことになりました。私費・交換・国費留学生、また海外交流校からの短期研修も受け入れながら1995年には、今教育学部になりましたけれども、教育学部の隣のところに国際交流センターができます。そして、この時期からは、アメリカ創価大学からの研修生の受け入れ、また日本文化体験等の日本語以外の授業が開始されたり、学部授業の特別履習が可能になるなど、留学生教育は一段と充実してまいりました。

(スライドを指して) これをご覧下さい。日本は83年から84年にかけてですけれども、「留学生受入れ10万人計画」というのを出します。これは当時の中曽根内閣の時、中曽根首相が東南アジアを訪問した時に、日本に対して厳しい論調を張る人たちがほとんど日本から帰国した留学生だった。こうしたことから本当に留学生の教育をきちんとしなければならぬ、或いはこれから先進国として生きていくために、この当時、日本が受け入れた留学生はほぼ1万人くらいだったんですね。それを21世紀の初めに10万人にもっていこうという、そういうような政策を打ち出します。これがいわゆる「留学生受入れ10万人計画」です。そして日本では非常に経済成長も大きくなってきた、これはそういう時期で留学生数はこういう形で順調に伸びていきました。この中で特に1989年から90年にかけて、非常に大きな上りカーブになってきますが、これは日本の経済成長に従って沢山の留学生が来るようになる。そして今まで国語・国文学科と呼ばれていた学科が殆ど日本語・日本文学科に改組になってくる時期なんですね。つまりそういう意味で国際的な中で日本語を捉えようという、風潮、そして留学生を10万人受け入れるためには、日本語教師の養成も必要という流れが出てきます。ただ、この留学生の受け入れの中で、アジアの通貨危機の時代には、東南アジアからの学生、特に韓国からの留学生が激減をします。またこの向こうのなだらかなカーブは、リーマンショック等で、経済的な状況で留学生の受け入れというのは、かなり変化します。そして2011年の3月には東日本大震災があって留学生が殆ど帰国をしていくというような事態もありました。今また新たにこういうような形で盛り返している。これが留学生数の動態ですけれども、そのような中で創価大学が、76年に別科を設置していると

というのは、かなり早い時期から国際交流を推進しようと大学が動いているのだというように思っています。

そして話は戻りますが、中国からの留学生の話になりますが、(スライドを指して)これは聖教新聞に載っている「新・人間革命」の中で、「人間外交」という部分です。これは中国からの留学生の受け入れをする、そここのところがずっと書かれていますが、これが創価大学の今日のスーパーグローバル・ユニバーシティの大きな基になっているのだらうと私は思っています。それはなぜかという、創立者がこの留学生を受け入れたことで、その留学生を受け入れる大学側の態度というもの、これが本当に他大学と違っていたという、ここなんですね、ここが本当に大きな問題というか、今後の発展の鍵だったんだと私は思っています。特に先ほども触れましたけども1974年、先生が第二次の訪中をなさいます。そして12月5日、病床にあった周恩来総理との会見が実現します。この時のお話も、後の76年の中国留学生・中国研究会の「月見の宴」の時に先生が本当に事細かく話をして下さいました。周総理の病気のお見舞いという名目でお訪ねになる、短時間で失礼をするということまでお話をしていただきましたけども、それが本当に一期一会の大きな大きなこれからの日中の関係に影響を及ぼしてくることになるのです。この74年の12月5日を受けて、池田先生のもとに金蘇城さんがみえて、中国の留学生の受け入れの依頼があります。この当時、まだまだ、先ほど言いましたように大学紛争というものが続いていたのです。そういうような中で、本来ならば国費の留学生ですから国立大学が引き受けるのが筋なのだろうと思うのですが、当時は大学では教授会が大変に強くて、入学試験をしないで留学生を受け入れるのはなにごとだと、こういう議論が沸騰します。外交というのは相互互惠なんですね。日本の外務省からの派遣の留学生は北京で無試験で大学に入っているんですね。ところが、中国から来た国費の留学生は入学試験を受ける。こういうことで膠着を致しました。その結果、彼らはしばらくどこにも行くことができなかった。そういうような中で、池田先生が保証人になって、まだ出来たばかりの5年目の大学に、この留学生たちを受け入れることになりました。先ほど言いましたように、スライドの一番の上が12月31日の会談です。そして、翌月の1月28日に、受け入れの実質的な事務の打ち合わせがあり、4月7日に滝山寮、それから朝風寮に彼らが入寮します。そしてこの入寮式には、先生自らがお越しになります。ありえないでしょ？ 入寮式に創立者がお見えになるなんて。創立者は寮生の皆さん方にお話をされる。この翌日には、留学生を学園にお連れになるんです。そして、4月8日に創価学園の入学式があるんです。本当に先生が望まれていたのは、兄弟として姉妹として、留学生との交流をしてほしい、そのためにまず寮にいらしたということなんでしょうね。「留学生との友情を軸にして、未来永劫にわたって中国の友人となり、強く美しい絆で結ばれた友誼の歴史を築いていって下さい」と先生は言っていっぱいますけども、まず若い人たちから、これが第一なんですね。そして次に、今度は学園にお連れになるんですね。

ちょっと戻しましょう。入寮式が終わった後、よく語られる桜の木の下です。もう夕刻なんです。その時に入寮式が終わられた後、5人の留学生を連れて、先生は散策をなさいます。その時に様々

に先生がお話をされましたけれども、そうした中で「中国から選ばれた優秀な学生さんたちは、私は大切な家族だと思っています。くれぐれも宜しくお願いします。」とお話をされます。また先生は分厚い皮のノートを贈られるんですね。そして、「その留学の一日一日をそこに記して下さい」とお話をされました。夜の桜咲くキャンパスを先生自ら案内されながら、「皆様方と初めて会ったこの4月の7日を記念日として永遠に留めたいと思っています」と仰いました。そしてこの事がね、この中の一人、程永華さんという現在の駐日大使でいらっしゃいますけれども、彼はこの日の事を深く心に留めていらっしゃる。そして2012年、大使になられて日本に戻られた時に、創価大学は名誉博士号を授与します。その折、彼は「是非桜のキャンパスを歩きたい」と話されるのです。入学式の日はずい人でしょ？人がいっぱいいるじゃない？ だけれども、SPの人も付いているし大変だったと思うのですが、でも彼は「あの夜を思い出しながら桜の中を歩いて池田講堂に行きたい」と言われて、本部棟から池田記念講堂まで、皆様方が全部会場に入られた後、歩いてそこまでいらっしゃるんですね。そのような思い出の深いひと時でした。

話は75年春に戻ります。入寮式の翌日、創立者は留学生を学園にお連れになります。そしてここでも「兄として」とおっしゃって学園生に留学生を紹介され一緒に卓球大会。そして大学の入学式を迎えます。その後池田先生は、第3次の訪中に旅立たれます。この第3次の訪中は4月にあったわけですが、武漢大学への日本語書籍の贈呈、またカンボディアのシアヌーク殿

日中友誼農場 1975年秋



1977年2月



(1975.11.2 — 2005.4.12)



下との会見も行われました。そして5月2日に、再び大学にお越しになった時に、留学生を呼ばれて、そしてこの時に第3次の訪中のお話をされて、さらにこれから9月にかけて先生はソ連に行かれる、という話を留学生にされました。この当時の中ソというのは、非常に厳しい関係にあったんですね。私は71年に中国に行きましたけれども、当時はソ連と中国はかなりの緊張状態で、北京市内は防空壕を掘っていたのね。そういうような厳しい中ソの状況の中で、留学生を迎え入れて、その留学生に「ソ連に行く」という話をされた。そのようなことがどのような意味を持つのかというのは、皆さん方はもうご存知だと思いますけれども、その9月に、先生はコスイギン首相と会見されて、日・中・露にわたる民間平和外交に尽力されます。こうした中で、中国の留学生は創大別科で日本語を一生懸命に学びました。その一方で、運動不足にならないようにと、畑を作ります。今の富士美術館、富士美のところが元大学の敷地でございました。そしてそこは大変に荒れた、雑草が茂っている所だったんですけれども、そこを開墾して畑にしました。(スライドを指して)ここに写っているのは中国の留学生ですけれども、実はこうした活動を応援して下さったのは、短大の初代の学長だった関順也先生でした。創価大学で農業研究会というクラブの顧問だったんですね。その学生さん方や中国研究会の方々が一緒になって、学生さん同士が日中友誼農場を開いていきました。このように自然に留学生と日本の学生間で、寮や学内で形で交流が続けられてきました。その2年間というのは、もちろん留学生喫茶であるとか、滝山祭・創大祭の餃子の店舗であるとか、あるいは中国語弁論大会であるとか様々の場面で、本当に家族として学生さん同士の交流が続きました。

そして、2年が経ち、卒業をしていきます。この日は雪でした。(スライドを指して)これが77年2月の修了式です。この2年間の中で一つ触れなければいけないことがあります。それは74年周恩来総理との会見の折、「私は桜の咲くころに日本を発ちました。」と話された周総理には桜の想いがお強かった。そのこともあって、75年に留学生が来た時に、先生はまず「桜を植えよう」と仰り「周桜」を植えるわけですね。(スライドを指して)、右の写真の木と左の写真の木、太さが違うでしょ。30年経っているんです。左が75年の11月2日に植樹をした時です。そして30年経った時の4月12日、全員が揃って創価大学を訪れます。この時に彼らは、程大使が当時、中国公使でした。そして一番背が高い彼が許金平さんといいますけれども中日友好協会の秘書長、そして白いスーツを着ている方が李冬萍さん、当時参事官でした。それから劉子敬さんと、今WLCの、皆さん方の中国語の先生でいらっしゃる李佩さん、そして滕安軍さん、この方々がそれぞれ中日友好協会の理事、或いは参事官、また李佩先生が当時は旅行会社の主席理事でした。30年経って戻ってこられた時の写真です。木の幹の太さを見ると30年の歴史ってすごいと思うでしょ？ けれども、この30年間の創価大学の留学生の受け入れというのは、正にこの6人の人たちが築いたところからはじまったと思っています。そして、卒業をしていきますが、その後2010年に程さんは、駐日中国大使として帰ってきます。(スライドを指して)この時の創立者の嬉しそうな顔。南米からのお客様にご紹介されるところですけれども。そして2010年から現在まで、

彼は中国大使として務めておられますけれども、一番大変な日中の関係の中を大使としてお過ごしになっていますが、実は2010年に大使になられて今年、2015年、先ほどの周桜を植えてから40周年なんですね。その時に彼は大使館のメンバーを大型バスでお連れになって、創価大学の周桜の観桜会にみえます。40年の歳月の中で築いてきたもの、程大使はその時に、ディスカバリーホールで講演をしてくれました。それは日中の、2つの国の交流の中でのことでした。彼は長春の外国語大学というところのご出身ですけれども、その外国語学校を作ったのは周恩来総理ですね。いつか日本と国交回復をした時に、日本語を勉強する人たちを育てておかねばならない。そういうことで作られた。そしてその第一期生として彼は卒業し、国費留学生の第一期生として日本の創価大学で学んだ。そして「日中の関係が厳しい時も、そうでない時も、どんな時も創立者はぶれなかった。そしてきちっと方向性を示して下さった。」という講演を母校でなさいました。

これはどういうことかと申しますと、先ほど「留学生受入れ10万人計画」というのをお話しました。それからその前に嘉納治五郎と弘文学院のお話をしました。これは留学生の受け入れ姿勢ということが大きく絡んできていると思います。先ほど中曽根総理が83年、アジアを歴訪した時に、対日関係の厳しい論客だった人たちが、みんな日本からの留学帰りの人たちだった。かつて清国からも留学生をたくさん受け入れた。嘉納治五郎は清国からの留学が禁止された時に、すばっと弘文学院をやめてしまうんですね。彼はある意味、当時の国家主義の中で、留学生には「教えるものだ」、つまり日本に学びに来ている。早く明治維新で西欧化した日本に、清国から留学生が学びに来ているんだから、教えてあげるといふ姿勢だったと思います。この姿勢が日本の留学生教育の中で大きく問題になっているのだらうと思うのです。それが池田先生という方は、ここのところが「教える」という一方通行ではないということです。滝山寮で最初に入寮式が行われた、そうした中で、まず若い人たち同士が繋がっていく、そして兄弟として家族として、共に学び合う。この姿勢があって初めて、留学生交流というのは成り立つんだということですね。

第1回
入学式



第3回入学式



第21回入学式 留学生数の変化に注目



第2通教棟 別科初めてのAV教室



当時の創価大学の留学生の受入れ、大きな創価大学の国際交流・国際化の第一歩、そしてこれを池田先生が開いたんだなということを改めてこのお話をするに当たって、私自身強く感じるところだったんですね。ですから留学生の受け入れ、留学生との交流というのは、単なる日本語を教える、或いは文化を教えるということではない、互いに学び合うということが大事なんだ。よく私は言うんです。短大の皆さんにも申し上げるけど、「郷に入れば郷に従え」これっていいと思う？

私はノーだと思っているんです。実は、日本の中に来たら日本のやり方に従えよ、これはある意味真実です。だけどやっぱりお互いが尊重しあう、サラダボールってよく言われますけれども、それぞれの人たちが交じり合って初めてひとつの新しい文化が生まれるんだ、その素地が1975年から6年にかけて創価大学の中では、しっかり培われた、そして創価大学で学んだ留学生は必ず帰ってくるっていうこと、これが物凄い創価大学の特徴なんだと思います。

今年、別科生或いは留学生のOB・OG会を10月初めに、創大祭、白鳥祭の最中に行いました。この時に1000人余りの留学生が戻ってきました。国費の留学生のカムバックプログラムというのも文科省が推進をしておりますけれども、なかなか地に着いていかない、だけれども皆さん方の先輩方の留学生はフェイスブック等でお知らせすると皆さんが帰ってくる。忘れずに30年、40年の節目に戻ってくる。これがどういうことを意味するのかということを改めて皆さん方はしっかりと感じて頂きたいと思っています。これがあって初めてスーパーグローバルがあるんだということなんですね。このあいだある雑誌に「各大学の国際教育力」というのが出ました。その中で創価大学は40年の優等生だという記事がありましたけれども、正にここの部分、単に国際戦略が良かったんじゃない。皆さん方それぞれの地球市民になろうというその思いを学生も教職員もそして留学生も共に持っている環境だからこそ、こうした留学生交流が成功してきているんだということ、このことをしっかりと私たちは肝に銘じたいと思いました。そしてこの原点がまさに創立者が築いて下さった40年前の中国からの留学生の受け入れだったのです。

創大祭『留学生喫茶』



日本文化体験



第一回SUA研修生



2007年春



日本文化体験



2010年春学期修了式



(スライドを指して) これは1976年、先ほどの中国の留学生ではなくて、別科が開設して9月に初めて創価大学が受け入れた私費留学生です。どこに留学生がいるか分かります? ちょっとと見にくいかもしれませんが留学生は5人だけの写真。あとは全部大学関係者です。それで入学式の写真なんですね。ここからスタートしているんです。5人の私費の留学生が初めてきました。(スライドを指して) それがまだこの第3回の入学式の時には、留学生は6人です。そして前が先生方、しかも日本語を教える先生はことここだけ。後は全部大学関係者。というようにところがスタートだったんですね。(スライドを指して) そしてこれが1982年中国の留学生以外の私費留学生が滝山祭の時に創立者と記念撮影をして戴いた写真です。今の松風センター前です。(スライドを指して) そして、なぜこの第21回入学式の写真を出したかというと、やっとここで留学生の数が教員の数を上回っているんです。そして今お見え下さっていますけれども日高先生とかあるいは倉光先生、山本先生、皆さん日本語の先生です。当時の土井別科長、そして小室学長で、後ろに留学生がこれだけの数が増えてきます。ですから最初は5人からスタートした別科ですけども2010年別科の閉科になる前の年の5月の時には41カ国から297名の留学生にまで増えていきました。35年目でしょうか。そして現在2015年、この5月1日では正式に創価大学が受け入れている留学生は42カ国、350名と伺っておりますが、ここまで発展をしてきています。

こんなふうに写真を見ていただいたほうがその発展の様子がよく分かるかなと思います。(スライドを指して) これは第二通教棟で初めて別科でAV教室ができた時、(スライドを指して) そしてこれは、留学生喫茶で皆さん方が楽しんでいた頃です。もう皆このお子さん方が短大や四大に入学されている、1981年の頃でしょうか。(スライドを指して) またこれは創価小学校との交流です。(スライドを指して) それからこれもそうね、でこれは(スライドを指して) 日本文化体験といって、日本人の方々もお辞儀はちゃんとできますか? 留学生はお辞儀の仕方から授業しています。(スライドを指して) でこれが初めてSUAの研修生を受け入れた時、(スライドを指して) そしてこれが2007年でしょうか、たくさんの留学生が増えてきます。(スライドを指して) これ日本文化体験。(スライドを指して) そして2010年の春の修了式です。ここになるともう今の馬場学長がいらっしゃるのが分かると思いますけれども、こんなふうにして発展してきました。

多くの先生方はじめ、別科で学んだ方々などがいらっしゃいますので別科のその後の姿等はきっとたくさんの方々がお話をして下さると思いますが、私があえて申し上げたいのは、世界市

民の学び舎創価大学と書きましたが、留学というのは国境を越えて学ぶこと、そして留学生は、未来からの大使だと言われていますけれども、創立者は国の宝、世界の宝というふうに仰って下さいました。かつては留学生を育てるのは知的国際貢献、そして国と国との安全保障のために留学生の交流があった、或いは大学の国際化のために留学生を受け入れてきた、これが長い間の日本の伝統だったかもしれない。でも創価大学というのは池田先生の先見性の中で本当に家族の中から世界市民を育てよう、この思いが最初から溢れていた大学なんだろうと思っています。だからこそ留学生がここで育っても必ず戻ってくる。そうして平和へ貢献しようというたくさんの思いを秘めた大学なのかなと思っています。現在 2008 年から留学生政策は「留学生受入れ 30 万人計画」となっています。かつては知的貢献の一環として留学生を育ててお国に帰すという事でしたけれども、現在では、日本やアジアのイノベーション、経済成長の担い手の育成と獲得、この獲得がすごいところなのですね。つまり日本のサポーターをしっかりと育てよう、そして日本の魅力の理解者、発信者になんていうことが留学生政策の基本になっているように感じておりますけれども、そうしたことを超えて創立者が目指されていたことというのは、今私は本当に印象的なのは一緒に学んだあの人が今は何をしているんだろう、そういう思いを致すことが平和の第一歩なんだ、ということをお話して下さったことがありました。留学生も、或いは日本の学生さんも教職員も互いに結んだここでの友情というのがいつまでも繋がっていく、その中で、互いに互いを思いやれる。これこそが本来の留学生交流の原点なのだと思います。そしてよく創立者は、「自分の子供以上に学生さんを大切に」ということを仰いますけれども、正にそこに人間教育の原点があるだろうと、そうした人間教育の世界的な拠点としてこれから発展していく、そうしたものが 1975 年から 77 年の間に創価大学の中ではしっかりと醸し出されていた。それが創価大学の別科の大きな歴史の原点だと思っています。様々な場所で語られている 75 年前後の中国からの留学生受け入れについて、今日は私なりに言及をさせていただきました。以上でございます。ありがとうございました。

質問①アメリカ人・SUA からの元留学生

(会場から：先程「留学生が戻ってくる」というふうに仰っていたと思うんですが、どういう意味で戻ってくると仰ったのかをお聞きしたいです)

「帰ってくる」というふうに申し上げたほうがいいかな、と思います。「留宝会」という、今回初めて OBOG の会合ができました。その時に初代の会長になられたのが洲崎さんという、先生のよく中国の通訳をなさっている方ですが、彼が「この留学生の中には成功した人もいる、ちょっとだけ成功した人もいる、そうじゃない人もいます。でも皆が故郷として帰ってくる場所がある」と語っていました。そういう意味なんです。だから心の原点になる場所、それが留学先だということは学生さんにとって幸せかなというふうに思っています。そういう意味で私たちは、別科の修了式、卒業式をする時に、「別科のドアはいつでも開いているよ、何かあつ

たら必ず帰ってきてね。」というのが私たちのいつもの贈る言葉でした。ですけれども、必ず母校に帰ってくる。この想いというのが、そうした家族、だから言いたいことは創価のこの学び舎の、この家庭から世界を視野に入れた地球市民、世界市民が育つということ、この事がすごいことなんだな、ということを私自身、そしてそこで一緒にその時代を過ごさせていただいたことを、本当にありがたいと思っています。そういう意味の「戻ってくる」という意味です。決して「サポーターになって日本で頑張ってるね」という意味ではありません。

講演会参加教員の発言

（今の話に関連して言うと、別科を卒業して、他大学或いは他大学の大学院に進学をした学生に聞いてみると、非常に寂しい思いをする人がいる。やっぱり、これが創価大学の特徴というか、人と人との人間の絆ができる、ここが故郷というか、そういうふうに留学生が感じられる。私も感動しましたので石川先生の話が伝わりましたけれども、こういうことができる大学というのは、日本の中で他にない。石川先生のお話にもあったように日本に留学しているのに、日本が嫌いになる、日本の敵になる。そういう留学生だっているわけです。それはなぜかという、そこで差別される、冷たくされる、信頼できる人間ができない。そこに大きな違いがあるんじゃないかなというふうに思います。）

正に今仰った通りなんですけれど、大学に来た学生さんが一年間誰からも授業以外、研究以外で話しかけられたことがない。そういう話をして下さったことがありました。そういうような中で、創価大学の学生さんは、多分道で会えば、学生ホールで会えば、必ず皆さん方声をおかけになると思う。そういうようなことからして違うんだよねというそんなことなんだと思います。

質問②ブラジルの女子留学生

（会場から：石川先生の一番の原点は何でしょうか）

さっきお話ししましたが、1968年日中の国交正常化提言というのが学生時代の私の大きな原点です。その前に実は色々あるんですけれども、未来部の時に創立者との出会いがありました。その中で、「何でもいから先生の元で、先生にお役に立てる人間になりたい。」それが私の学生時代の願いでした。そうした時に、その当時はまだ中国語を勉強している人も本当に少なかった。その中で、さきほどお話しした「光があるのだ」という正に、これだったんだ、もしかしたら真っ暗な闇だけれども、自分が一つでも努力をすれば、その光に少しでも近づけるかもしれない。そして創立者にお役に立てる仕事ができればいいなと思いました。それがまさかこんな形で、私が創価大学に40年いるということも考えられなかった。学生時代は、大学の教員になるなんて夢にも思っていなかった。だけど先ほども話しましたが、留学生が作物を作ってね。日中友誼農場でそれをみんなで食べる会、お月見の会をしたんです。その時に先生がわざわざ足を運んで下さっ

て、皆さんが真心を込めて作った物だからということで2時間ほど懇談をして下さったんですね。その時に「青春時代、若い時の誓いを果たすことが大事なんだ」ということをお話して下さり、若い時に誓ったこと、これを生涯かけてやり続けることの大切さというのを改めて、深く心に刻みました。先生の思いは、それはここにいる中国の留学生と皆さん方がしっかりと留学生とね、生涯にわたって兄弟であり、友人であるという、その絆を確認していくことが世界平和への第一歩なんだ、そういうような趣旨だったと思いますけれども、本当に私は19歳で1968年の原点、これは忘れられない。本当にあの日大講堂の片隅で大学の一年生として何をしていたかわからない中で、決めた一つのが今こうして40年間お仕事させていただいたということに尽きせぬ思いがあります。

質問③韓国人職員、元留学生

（今まで何百人もの留学生を教えてこられたと思うのですが、その中でも忘れられない留学生はいますか？）

います。みんなです。全員です。そこにダニーさんもいます。ここにいる留学生もみんなです。或いは既に創価大で教鞭をとってらっしゃる方々、私は教務手帳、出席から成績まで書いてあるのを、実は35年分持っているんです。それで今回改めて全部並べてみました。そしてこの方どうしているかなということも含めて思い起こしました。でも殆どの方が何らかの形で帰ってくる、コンタクトがあるんですね。それぞれに忘れられない方だなと。だから今あえて、中国の留学生の話をしました。でも先生が日中の国交正常化をしたことによってね、台湾の留学生たちは実はとっても寂しい思いをしていたかもしれない。そういうこともあわせて、それぞれの国から来た、それぞれの留学生というのを、私が関わった学生さんは忘れられない方々です。既にもう鬼籍に入られた方もいます。また親子二代で、或いは兄弟で学んで下さった方もいらっしゃいます。だけど本当に創価大の草創期、今日までを築いて下さった方々なんだと思います。そして今同僚として仕事をする短大の先生方の中にも実は教え子がいらっしゃいます。そういうようなことで、忘れられないことは大事に大事にとってあります。ただね、一言だけ申し上げると、別科は2011年に今までの形の別科はなくなります。そして日本語・日本文化センターに変わりました。でもこの2011年というのは実は、3月に東日本大震災がありました。そしてその年は卒業式ができなかったのね。本当に思い出してしまいますけれども、留学生がそれぞれに電話をくれました。帰りたくないんだけど、日本が原発がこういうような状態になって親がどうしても帰れというから修了式に出ないで帰ります。卒業式に出ないで帰ります。或いは一時帰国しますというお電話を本当にたくさんいただきました。そしてその年がそういう意味で別科の最後だったのです。だけど彼らは必ず帰ってきますと言って下さって、その思いというのが今でも忘れられないかなということを思っています。

質問④韓国人留学生・教職大学院生

(私は2007年に別科に来て、運よくも石川先生の授業を受けられた一人として、私の成績も先生の手元にあるってことにとっても驚いたんですけれど。私の質問は、留学生の間では帰国子女というふうに言っていて、自分は日本人でありながら他国で生活をしていて、創価大学に来て日本語を勉強しようという人がいるんですけど、その一年間だけでも自分のアイデンティティーについてすごく悩む姿を見てきました。でも私は韓国人でありながら、もうここで9年間日本語を勉強していて、自分が誓いを果たしていける場所というのは、日本と決めていて、教職大学院に進んでいったんですけど、でも本当にその青春の誓い、韓国に人間教育を広めるところでは、日本では誓いを果たしていけないから自分は韓国に行かざるを得ないというふうに、すごい悩むと寂しい思いがありました。先生はここで勉強した人たちがどうやって活躍をしてほしいというふうに思っていられるのでしょうか。もちろん国は関係ないというふうに思っているのもあるんですけど、先生方は今まで活躍をしている留学生の姿を見て、そういうふうに思っていられるのか、お話を聞かせて下さい。)

すごく難しいね。だけど私はそれぞれでいいかな、というふうに思っています。そして人生というのは、そういうことを語る年になってしまったんだけど、長いレンジで考えたほうがいいのかな、5年とか10年とか、そして20年30年先、先ほどのあの桜の枝ですらも30年であんなに変わる。だから今10年に満たない時期であんまり悩まなくてもいいのかなと思っています。それぞれ長い人生を振りかえてみて、あの時はこうだったかなというのでもいいのかなと思っています。私がもう一つ言いたいのは、別科というのは留学生に言わせると地獄なんだって(笑)。なぜかという、一年間で物凄くハードな日本語教育を受けるわけです。私短大に行った時に皆さんにね「二年間で勉強するの大変でしょ。」とよく言われました。「でも私は一年間でやってきたんです」と。だからそんなに心配することないかもと実は心の中では思うこともありました。一年間で留学生がどれだけ成長するか、っていうのを目の当たりにして私たちは仕事をさせていただいてきたんですね。ですから、例えばよく別科地獄だとか言われた。学生さんたちに「月曜日の試験はやめてください。」月曜日の朝、必ず一週間のレビューテストをするのですが、今もあります？(会場から「あります」の声)あるそうです。日曜日にゆっくり出来ないからやめてくださいということを随分言われました。でもやり続けたんですね。それはなぜかという、たくさんさんの時間とお金と色々な人の思いを受けてきたわけだから、力をつけてほしい。そんな思いがありました。だからその時期にどれだけ勉強するか、そして自分自身がどれだけ誓いを果たそうとするか、その思いというのは必ずどこかで開く。だからお国のために、でも、私が留学生にお願いしたいのは、或いは皆さん方日本の方々にもお願いしたいのは、「平和のために生きて」ということなんです。だから、もちろん自分自身のためにきちっと自分自身の生活を考えていく。でも心の先に、本当に平和のために何か一つでもいいから自分自身の人生をかけてほしい。それは、日本でも中国でも韓国でもアメリカでもどこでもいいんです、ブラジルでも。「人のために

生きる」というこれが創価の教育の一つの原点だというふうに思っています。